

青年開発

— 特集 —

宮古島台風被害救援に出動して



社団法人 産業開発青年技術協会

No. 12

集

特

沖繩宮古島台風被害救援に出動して

長 沢 亮 太

◎ 救援に出動

昨年九月六日、沖繩宮古島に風速八五・三メートルという史上最大の台風が襲来した。ニュースによると、全島惨たんたる被害で、家屋は殆ど崩壊して、その数一万戸にのぼり、唯一の産業であるサトウキビは全滅に近いというショッキングなものであった。

新聞をみた私は、さつそく地図を開いてみた。台湾すぐ近くにある豆つぼほどの孤島である。沖繩列島の中でも最南端に近い。

沖繩は日本の領土であり、そこには日本人同胞が住んでいる。しかし今日の沖繩は未だに米軍占領下であり、日本のものであつて日本のものでない、変則的な立場に置かれて苦しんでいる。

私はこの瞬間に「そうだ、産業開発青年隊をひつさげて救援に赴こう」と。それは天来の響きともいふべきインスピレーションとアイデアだった。

それから建設省はもちろん、総理府、特運局、大蔵省、南方同胞援護会、琉球政府、アメリカ民政府等あらゆる関係機関との折衝を開始して約一ヶ月、願いはようやく実現して十月十日産業開発青年隊三〇名とともに総理府総務長官、南援会長、建設大臣の壮行式や

関係者多数の激励の言葉を載いて壮途についた。

宮古島に上陸してからの、隊員の活動はめざましいものがあつた。

崩壊した道路の整備、倒木の処理、仮設住宅の建設等、殆ど全島に亘つて出動し、予定行程の二倍の成果をあげ、さらに新設や開拓地造成等の予定外の仕事まで取組んだ。

復旧建設工事について成果をあげることは、青年隊員ならば必ずやれるという自信があつた。

青年隊の活動は、たんに復旧建設工事を遂行するのみにとどまらず、悲惨な被害にうちのめされて、絶望と苦悩にさまよつていた島民はもちろん小学生、中高校生、先生方や教育委員、市町村役場関係者、青年団、婦人団、経営者等々、各階層の人々と交歓し、立ちあがる勇氣と希望と愛を与えたのである。

現地における活動状況については、前田指導官が詳しく記述するので省略して、ここではその時の私の感想を一編の詩として綴つたものを載せることにした。その片鱗を推察してもらいたい。

民族の動機

産業開発青年隊

宮古島派遣隊長

長沢 亮太 作詩

十数年の変遷を耐えぬいて、
産業開発青年隊の綱領は、
われらが精神の背骨となつた。
不屈の信念と友愛と團結をもつて、
産業開発に挺身し、人類平和のためにつくす
高き理想がわれらの使命

一九六六年九月六日

南海孤島の宮古島に

台風被害の惨状を知るや

富士山ろくのわれらが若を襲いし

台風二六号の暴虐を突き

海上一〇八八哩の荒波を越えて

同胞救援の使命に赴く。

この島は、一握りとはいへ

敵として日本の国土、島民は日本人

今歴史の悲運に抵抗して絶唱する

民族の慟哭をきく、

沖繩を祖国に返せと

われらは島民と共に、

土を掘り、石を築いて、

大野山林の丘に記念碑を建てた。

「その奉仕と友愛と不屈の精神は

島民に希望と勇気を与えたとともに、

同胞一体の礎を永遠に築いた」

◎ 現代の課題は何か

これこそ産業開発青年隊が長い間、悲願とし、理想としてきたことの実践であつた。

そしてまた、まさに平和部隊としての理想的なあり方のテスト・ケースであつた。

現代における最大課題は何か。それは国内的にも、国際的においても、自然流動する資本主義経済の歪（ひずみ）としわよせの結果として、富める地域、あるいは富める先進国はますます富んで繁栄し、未開発で、おくれた地域、あるいは諸国は、ますますおくれて、貧困と未開に苦しみ、その格差は激しくなる一方であるということである。

そして、このままで自然の動きと流れのままに放置しておれば、双方ともに限界を生じ、やがては混乱と論争を招いて人類全体の平和と繁栄は破壊されてしま

うであらうということである。

われわれはそのことに気づき、産業開発青年隊という組織体をつくつて、以上の現代的課題に取組もうというのが、青年隊の究極の目標であつた。

しかも産業開発というもつとも重要な基礎部門を通じて挺身しようというのである。

今日青年隊は十五年の歴史を経て七六〇〇名の修了者を輩出し、国内第一線の産業開発に挺身すると同時に、東南アジアやアフリカ等の開発途上にある諸国にも、海外協力隊や企業進出等を通じて数十名のものが活躍している。

隊員諸君の活躍はそれぞれの立場でいつしようけんめいであり、成果もあげている。

唯もう一步欲をいえば、青年隊としての集団活動にまで至つてほしい。組織力をもつてやるならば、影響力も効果ももつと大きいだろうと思うのである。

その点、こんどの宮古島派遣は多年考えてきた、理想を實踐する格好のチャンスともなつたといえよう。

そしてその成果に対して、愈々自信を得たのである。

宮古島には、われわれが取組む現代的諸問題が凝集していたのである。

それはたんなる台風災害の救援活動だけにとどまら

ず、

一、低開発地域の経済社会開発問題

一、離島振興対策としての問題

一、占領軍基地問題

一、国際協力のいわゆる「南北問題」

一、更にヴェトナム戦争に直結した平和問題

等である。

したがつて宮古島の問題に取組むことは、沖繩問題、日本の問題、東南アジアの問題、世界の問題に取組むこ

とになるのである。

△宮古島方式を實踐しよう。

こうして宮古島における青年隊としての実践活動は、まさに理想的な平和部隊としての実践でもあつたわけ、この宮古島派遣の方式を、国内の後進地域山村や臨島の開発に取組む方法として実践し、またその経験を通じて訓練されたものを、海外低開発国の開発に応用させようというのが私の念願である。

——「二〇代」のなしとげたこと——

① アインシュタイン

この人はドイツ生れの理論物理学者で、ノーベル賞をもらつた大学者であるが一六才で運動体の光学に着眼し二九才で光子量子仮説、ブラウン運動の理論および相対性理論を発表した。

② エジソン

この人はアメリカの発明家であるが一八才で自動中継器の発明をなし二四才で印刷電信器、二五才で二重電信器、そして二九才では蓄音器を発明した。

③ ワット

この人はイギリスの優れた機械技術者であり発明家であるが二九才の時ニューナンの蒸気機関の欠点を発見し外部激縮器付の蒸気機関を発明している。

④ ガウス

この人はドイツの数学者、物理学者、天文学者であるが二二才で整数論、二四才で整数論研究を発表し、三二才の時には天体運行論を発表している。

宮古島台風救援派遣隊

前田 博司

(中央訓練所)



十月も末だと言うのに、宮古島はしやく熱の太陽が燃え、台風後の復興建設に大わらわであつた。倒壊された家屋、防風林はなぎ倒され、改めて台風のすさまじさを目前にし、心を引きしめられて上陸した。

島は、戦時中日本の軍隊によつて、全国比類のない美しい林が(二二九〇ヘクタール)乱伐され、農地(一〇一万坪)牛馬、家屋等が接収、徴収されたが、日本の勝利を期して心からの協力を、島民一同惜しまなかつたが、夢は破れ、敗戦となり、故国も失ない、新らたな、米国民政府の行政下におかれ、今日もこの管理が続いている。

海の色は、日本内地の海と違つた。もつと深い青、そして痛めつけられた砂糖キビの緑、赤褐色の防風林が実に対称的な色彩で、まるでその島の複雑さを表わしているようであつた。

島の農村で働く人の姿をみると、台風によつて労働意欲を失つたのか、また島特有のスローモーさなのか労働と生産に対する考え方は皆無に等しく、活気が失しなわれていた。農耕用トラクターの類はわずかに数台にすぎない。そして、島民は毎年のように襲つてくる台風と、早バツ等の天災に見舞われており、特に今回の十八号の台風による災害はひどく、宮古島の生命線である砂糖キビの生産は、大きな打撃を受けていた。島の人々は、経済的な打撃も勿論だが、精神的な打撃も計り知れないものがあり、特に、日本内地からの救援に期待するものは、金銭にまして、精神的な救援を心から欲していたようである。

この点については、我々青年隊は、単なる労働力の提供をもつて、宮古島に派遣されたのでなく、奉仕の精神をもち、同胞愛に培ちかつたあらゆる面にわたつての活動を心に期していたので、島の人達との心の交流をなしていった。

これらの交流は、作業の休憩時、昼休み、現場までの往復が、日常のきまつたなかに、細やかな心の疎通となつてなされ、だんだん輪が大きくなり、救援金、



救援物資等をはるかにまさる、救援活動となつた。同胞愛に島の人達と一体感を持ち、復興の土にこの上ない偉大なものを残したのである。

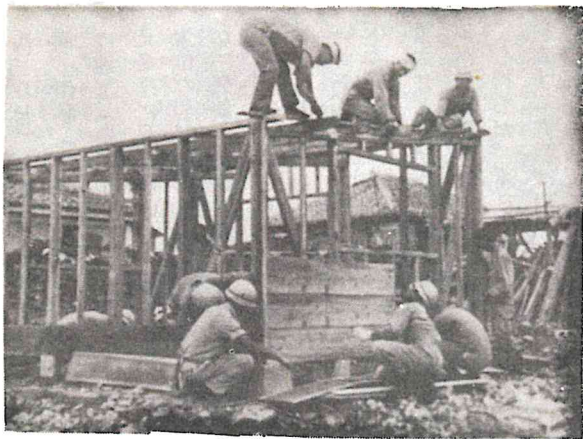
ちなみに、青年男女の少ない、この宮古島の人の中には、隊員達の暖い交流より生じた、人間性にほだされ、我が子のように感じられたのであろう。「是非家の養子に下さい」と、養子縁組を要請された隊員が二、三人あつたのである。このような交流は、昼間の作業中心の時間に計画を立てられたなかにあつて、午前、午後の休けい、昼休みの一刻また、現場までの往復の時間になされたのであるが、このような短時間の累積が成果を

なしたとき、累積を特に、心がけたのでなく、ごく自然の姿でなされたのは、派遣隊員一人一人が、自己を「派遣」の中に確立したからである。

これはまた、作業活動のなかでも言えることであつた。

隊員は自分達の与えられた「使命」を、全身で考え、表現した。寸分のすぎもない、精神的にも、肉体的にも余ゆうのない、毎日であつた。「使命観」の確立と「遂行」のための自己闘争、それらが立派になされて、今回の成果となり、島民との間に、民族同胞の一体感を強めたのである。

現地での主たる作業は、道路の整備、石粉掘削、伐採、抜根、開墾作業、仮設



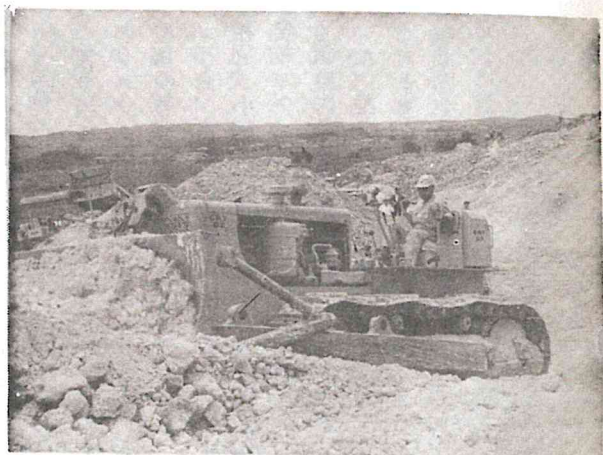
住宅建設、市営住宅地造成工事、新農道建設工事、倒木処理、小学校ブロック塀の建設、中学校の運動場化、都市計画測量等であつたが、隊員ははじめから馴れない自然的、社会的悪条件に見舞われその困難と困苦はすべて予期しないことばかりであつた。

南国特有の直射日光は、無情にも隊員の目を痛めつけ、汗は動かずとも流れ出る。食事においても隊員が訓練所で食べているような日本食と異なり脂肪分が多く野菜が極端に少ない南国特有の食事で多くの食傷害者を出した。

飲料水においても同じで内地とは異なり、作業を始めると汗が出るので、生水を遠慮なく飲む、そして四日目には下痢患者が二、三名発生したのであるが、五日目には、アメーバ赤痢が発生してしまつた。

宮古島といえども赤痢は法定伝染病であり当然隔離しなければならぬが、しかし災害復旧という重大な使命をもっている以上一日たりとも休むことは許されないと悲そうな決意をもつて、発熱患者も、下痢患者も、赤痢患者も結局病人として取扱うことはできなかったのである。こうなると自己との闘いだ。自己に勝つ以外に何もない。これも使命の一つとなると考え頑張つた。

直射日光は相変わらず、容赦なく照りつける。汗は止まない。喉が乾く、重機



運転者、伐採者は特にガンガンと脳に響く。水が欲しい、だが生水は当分飲まないとお互いに約束をした。その上に現地住民の言葉は思うように通じない。標準語を使つてくれるのはある特定の人達だけであり、誤解をうけたり、まねいたりしたことがたびたびあつた。

起床六時、直ちに市内を駆足訓練、晩秋の朝六時はまだ薄暗く、宮古の街は静かである。この静けさの中を、青年隊独特の連続呼称で市内の各コースを走つた。

最初の二日、三日と別に反響はなかつたが、日を重ねるにしたがつて反響は大きくなつた。それは台風後特増加した不良青少年に対しての影響であり、無言の教訓を与えた。

れた たんたん輪が大きくなり、救援金、

るが、このような短時間の累積が成果を

教育者、経営者、主婦、警察等は口を揃えて呼びかける「青年隊を見習え」、「青年隊に負けるな」と訴えていた。隊員の掛声を聞いて、市民は駆足を見送る中には、隊列に加わり走る人もあつた。

昼間は作業、七時三十分～十九時、夕食二十時、その後、各種団体との交歓会のため指定会場へ、又沖縄の政治、経済文化、郷土史研究のため図書館へ、あるいは空手練習のため警察署の道場へと行く。このように夜は毎晩スケジュールが組まれている。昼間疲れきつた身体と精神で交歓会に出席することは大変なことであつた。だが、隊員達はどうな場合でも明るく楽しい表情で臨んでいた。

点呼十時、一日の反省、明日の作業計画、打ち合せ、記録の整理、時計は十二時を過ぎている。全隊員が床につくのは午前一時から二時、これが現地での日課制限であつた。

十月十六日、宮古島上陸より、十一月十五日、宮古島を離れるまで、隊員は我れを忘れて救援活動に従事したのである。さて作業については

◎新農道建設工事

この工事に取り組むまでは、種々と政治的な配慮があつたらしく着手は予定より約十日間遅れた。計画案は示されたものの一向に実施に移せなかつたため隊員は大部精神的に動揺をしたようだ。

十一月十九日にブルトーザー二台（D八、D七）を導入、隊員は川口、黒田、滝、伊藤（信）の四名を配属する。現場は地形（傾斜十五度）土質（湿地帯のうえ各所に泉が湧いている）岩石（五立方米位の岩が計画路線上にゴロゴロしている）氣象（天気不順）と悪条件が重なり施工が全く涉らない。本来ならば、湿地ブルドーザーで施工すべきかも知れないがそれもない。しかも期間は十三日まで（五日間）期限つきだ。隊員は責任の重大さとおせりを感じる。住民の道路完成への期待が大きい。追いつめられて行く心持だ。連日の雨で休む所がなく、持参する弁当は雨をスープにして流しこむ。着ているものはすべて濡れきって完全に肌に吸いついている。

部落から排水作業の応援に来ていた四人は現場を去っていった。孤島にも等しいこの現場に残された隊員達はまさに孤独そのものであった。だが、隊員は悪条件が重なるに従って、ますますファイトをもやし総力を結集して、荒削りだけはやりとげた。

十一月十三日は久しぶりの快晴で、鮮烈な太陽とライトブルーに輝く海は自然の景観だった。

◎道路整備

モーターグレーダー二台（災害救援のため琉球より配置された）一台は平良市の市道補修へ運転員由野隊員、一台は城

辺町の農道補修へ運転員荒木隊員の配置であり、この外に琉球政府建設局職員が各機種に一名ずつ就いて、初日だけ隊員の指導に当たってくれた。

はじめて試みるコーラルリーフの施工は内地で体験した土質上の施工とは操作上大変異なるものがあつた。それだけに身体と神経は疲れた。でも初日から予定工程を若干上回ったことは大変に嬉しく又自信を得たようだ。

二日目から工程は更に順調に進み、作業計画は毎日変更しなければならなかった。これには与那覇建設所長も驚いて嬉しい悲鳴をあげる程だった。特に農道の九十パーセントが路面流失した城辺町では、各部落からの補修、整備要請が毎日あり、



荒木隊員はその答えに悩まされていた。無理もない。農道は住民にとつては命の綱である。サトウキビの手入れと収穫は大事であり、それをやるために是非でも必要な道路であるからだ。補修の済んだ道路を馬車を引いて行く農民の姿は、道路の復旧に喜びつつも、国土の将来を考え合わせるのだろうか。何かしら淋しいものがあつた。

◎小中学校のブロック塀の建設

文教関係に甚大なる被害があつたことは、出航前に聞いたが、台風後一ヶ月も経過しており、家屋、林業、建設関係に見られるような生の爪跡は余り感じられなかった。

教科書及び学用品は、日本及び琉球政府その他各種団体より救援の手がさしのべられ、先生も生徒も以外に表情は明るかった。

割り当てられた現場は、上野村小学校のブロック塀の積替えと同村中学校の運動場の整地であつた。配属隊員は十名（小倉、富永、宮原、竹田、香川、樋口、相羽、小林、伊藤信、落合）倒壊された学校のブロック塀は、一ヶ月を経過しても道路に散らばり往来者の妨害となつていた。誰もかたづけろ者がいないのか、それとも青年隊が来るのを待っていたのかとにかく、急を要する工事であつた。最初は道路上のブロックの整理からはじめた。三日の予定も一日で済み、交通は

スムーズになった。仕事をしている隊員をはじめてみる小学生八七三名は、何かしら寄りつかず、遠くから物珍らしそうにただ眺めていた。

学校の塀が一段一段と立派に積み重ねられて行くに従って、生徒達の隊員に対する関心が急に高まってきた。そのうち一人、二人、三人と隊員の所に来て、何やら囁いている。話をしたくても話せない子どもというものであろう。三日目を迎えてようやく隊員と生徒との意志は通じた。だが女子生徒にはまだ隊員との間に遠慮があつた。それは男に対する意識か、純粹なる恥かしさか、そのうち六年友利良子、砂川真知子、その他三・四名は隊員の作業中を見計らい手紙を置いていった。

夕食後隊員達はこの手紙を読みあげた。その内容は感謝を表わしたものが殆んどであり、なかには未来の人間像や租国復帰を願う詩もあつた。読み終った時、一同来てよかったと再認識した一コマもあつた。これこそ青年隊綱領の具象の所産である。その後も手紙、作文、絵画がぞくぞくと寄せられた。これが本土への貴重な土産となり、生徒一同に対して深く感謝する。

ブロック塀完成間近になり、生徒の手伝いはじまり、次は父兄へと伝わっていった。こうして台風によつて倒壊された小学校の塀は、四十日振りで青年隊、

生徒、父兄の三者の愛と汗の結集によって立派に完成したのである。(帰省するまで、数回にわたり交歓会を行ない、小學生とは実に仲良くなり帰隊後も隊員との文通を交わしている。)

◎仮設住宅建設工事

十一月に入ってから天候は連日雨となり、雨具の携行は忘れられることはできなかった。南国とは言え、晩秋の雨は冷たく携行した雨合羽は二、三時間で着物を濡し、肌へと染みる。着換えは二日目ではなくなり、毎日の服装は濡れた下着と上着で現場に行く始末である。一週間降り続いて、乾かすことができないのである。雨の中で作業振りは、いつもと変わりがなく明るく健康的であり、家の組立てに懸命に頑張っている。

考えてみれば隊員の無理から無理への移動であり、健康管理、衛生管理の面からも心配の点が多くあつた。隊員の実績と成果はその困難、困苦の中から生まれたのである。又それは報酬に無関係でもあつた。それなのに、隊員は青年隊の目的と使命である、奉仕精神と人類平和建設のために、己れを捨てて頑張っているのである。

住宅建設の現場では、台風により全壊された家族が中を合羽も着ずに完成を待っている。住む家がない人であり、あつてもそれは家畜小屋に住んでいるようだ。隊員はこれら家族の悲壮な状態を

みせられ、疲労も雨に濡れていることも忘れ、ただ家の完成だけを急いでいる。実に尊い姿である。最初に出来上つた家を見て、喜んだのは隊員は勿論のこと、今迄家畜小屋に住んでいた野原 部落の佐知田靖光一家であつた。このようにして二十棟の住宅が完成したのである。

◎倒木処理

疲れきつた精神と肉体を克服しながらの、伐採作業は強靱な忍耐力と体力を必要とした。初日、二日、三日、四日と馴れない気候と仕事、そして食事と悪条件と緊張の中で自我を捨てて頑張つた。

木(木麻黄)の太さは直径十五センチ〜三十センチであり、木質としては硬い方である。機具としてはチェーンソー、マサカリ、ナタ、手ノコ等を用いた。一般住民の手ノコによる伐採量は一日平均十五〜二十本であり、隊員は初仕事でありながら二十本〜二十五本、その後熟練して二十五本〜三十本となり、一般民の二倍の量になつた。この倒木処理は、単に伐り倒すことだけでなく、玉切、積重ね道路までかつぎ出し、トラック積み込み等の関連作業であり、特に丸太を道路まで担ぎ出す仕事は激動中の激務である。玉切した丸太を五〜六本肩にのせると六十キログラム〜七十キログラムとなり、その上に軟弱地盤のため足は吸いこまれ歩行困難となる。三日、四日と自分の身体を忘れて頑張つた。気が付いた時は、肩

は腫れあがり、瘤ができ、手にはいくつかの肉刺をつくつていた。しかし隊員はこのような困難困苦に堪え抜き、予定伐採量の二倍(二〇、二二五本)の実績をあげ、城辺町、下地町現場の倒木処理作業を終えた。この間、伊藤隊員が伐採中倒木により二週間の打撲傷をうけた。原因は疲労が重なつてさけるだけの敏しように性が失われていたのである。また中訓にあるチェーンソー四台を持つてこなかつたことは何としても残念なことである。

以上のようにして、宮古島の救援作業を行なつたのであるが、帰途はかねてからの念願であつた、沖縄産業開発青年隊との交歓会をもつたが、両隊とも夜更けも忘れて、青年隊の使命、目的を語り合い、双方がかたいきづなを結んだのである。

現在の宮古島には多くの未解決の問題が山積されている。産業基本施設の整備、教育施設、道路の整備、農林、畜産の振興等があるが、根本的な社会開発の要点は、我等青年の手によつて、なされなければならないと考える。沖縄の青年隊も、内地の青年隊も、宮古島台風においては、同一の目的のために働いた。産業を開発し、そして興し、平和を実現するために、民族、国境を超越して互いに豊かな協調性をもつて、進むことより他はないのである。

十月十日、富士山麓を出発し、十一月

十九日東京に着き、翌二十日、NHKの「スタジオ〇二」で全国に報告をし、

二十一日、南国より一足飛びに雪化粧の富士山麓に全員無事、元氣一杯帰つたのである。この一ヶ月に得た、我々の試練は言葉に表わせられないものを得た。大義のための使命を遂行する、自己との闘いに勝つたこと、大いなるものであつた。

さて全国の救援活動が何ら考えることなくできたのは、関係の方々の厚い御後援があり成果をもつことができたが、私達が頭が下つたのは次のようなことであつた。

それは、由野派遣隊員の母が亡くなつたのである。彼が現地に於て懸命の救援活動を行なつてゐる時に、亡くなつたのであるが、彼の父はこれを知らせなかつた。父は、この度の救援の意義を深く理解し、てくれたと同時に、立派な活動を息子に願つたのであろう。母の死を知つて、息子の活躍に挫折感があつてはならないと考えられ、知らせなかつたのである。また、大義の前に私情をはさむことを断つたのである。由野隊員は充分に活躍し、任務を遂行した。そして、中央訓練所に帰ると同時に、痛ましき母の死を知つた。父は彼の帰隊した時間を計らつて、打電したのである。これは申しようのない、人間として遂行しなければならぬ「大義」のための「使命観の確立」は、隊員はかりでなく、隊員の父兄も立派な考えの上に、自己をたてられたのである。このような尊い人間性に立脚して、今の度の「宮古島台風災害救援活動」は終つたのである。